

社會階級別ト出生率トノ關係

講師 高田保馬

- 一、概説——まるさす人口法則ノ改造
- 二、從來ノ研究
- 三、生物學的説明
- 四、カノ欲望
- 五、出生率減少ニ關スル福利説

一、概説——まるさす人口法則ノ改造

吾人ハあだむ・すみすノ富國論ニ於テ既ニ「貧乏者子澤山」ト云フ俚諺ト意義ヲ同ジウスル文句 Poverty is stimulus to generation¹⁾ヲ見ル事ヲ得。此思想ハ實ニ後日ニ至リテ發達シ來レル反まるさす説ノ萌芽ヲナスモノナリ。敢テソノ後ノ學者ヲ刺激シテまるさす人口法則ノ改造ヲ企テシメタリト云フニハ非ズ。此數語ノ中ニ含マレタル事實ハ精細ナル研究ノ遂ゲラルルニ及ビ、遂ニ數多ノ學者ヲ動カシテ斧鉞ヲまるさす説ニ加フルニ至ラシメシナリ。

QueteletノズリカセるParisノ倫敦 Schwabeノ伯林 Villermé et Benoison de Châteauneuiノ巴里ニ就イテ、貧富ト出生トノ關係ヲ研究シタルヲ初メトシ、同種ノ研究ノ漸ク興ルニ及ビ、人口論ニ興味ヲ有セル學者ノ中、此研究ニ暗示ヲ得、又ハ其結果ヲ證據トシテ、まるさす説ノ改造乃至修正ヲ企ツルモノ相踵グニ至レリ。彼等ノ着眼點ハ皆一様ニ物質的幸福ノ差異ト出生率ノ差異トノ間ニ存スル一定ノ關係ニアリ。富者ノ出生率ハ極メテ小ニシテ、貧者ノ出生率ハ甚ダ大ナリカ

1) Adam Smith, Wealth of Nations. edited by Belford Bax. London, 1887. p.8c.

クテ、彼等ハ食物ヨリモ速ナル人口ノ増加ヲ以テ部分的現象ニ過ギズトナシ、之ヲ以テ一般的原則ナリトナスまるさす説ヲ否定シテ、タダ、時間的又ハ階級的ニ極メテ局限セラレタル妥當性ノミヲ與ヘントシタリ。まるさすノ人口法則ハ僅ニ勞銀制度ノ初期ニ就イテ妥當ナルノミト唱フルるおりの如キ、マタンハタダ自然狀態ニノミ妥當ニシテ、文明人ニ行ハレズトナスがおるふ²⁾ノ如キ、又ハ、社會ノ下層ヲ形ヅクル貧困無知ノ階級ニノミ妥當ナリト説ク Wohlstandstheoretiker³⁾ノ如キ皆コレナリ。吾人ハ今敢テ、まるさす説トコレヲノ修正説乃至改造説トノ是非ヲ論ゼントスルニ非ズ。タダ人口論ノ研究上、此ノ如ク重大ナル意義ヲ有スル事實ニ關シテ、從來數多ノ學者ニヨリテ蒐集セラレタル雜多ノ統計ヲ整理シ、延イテハ其間ニ存スル相關ノ原因ヲ考察シ、更ニ轉ジテ、此考察ヨリ來ル人口學上ノ一提説ニ批評ヲ加ヘント欲スルナリ。

二、從來ノ研究

貧富ト出生率トノ關係ニ就イテハ、從來ノ學者ニシテ統計材料ヲ發表シタルモノ其數少カラズ。素ヨリ研究ノ便宜ヨリ云ハバ、一方ニ於イテハ財産又ハ所得ノ多寡ニ應ジテ人口ヲソレゾレノ部分的集團ニ別テ、他方ニ於イテ、此部分的集團ノ平均出生率ヲ覓メタルモノヲ最良ノ材料トナセドモ、事實上ノ障礙ハ二ノ方向ニ現ヘレ、從ヒテ從來ノ研究モ、此模型ニ合スル事稀ナリ。二ノ方向ニ於ケル障礙ト云フハ次ノ如シ。其一、カカル最良ノ材料ハ研究者個人ノ努力ヲ以テ容易ニ作製セラル可キニ非ズ、勢、從來他ノ目的ノ爲ニ作ラレタル既存ノ材料ヲ利用セラレザル可カラ

2) Loria, La morphologie sociale, 1905. p.90.

3) Julius Wolf, Ein neuer Gegner von Malthus, Zeitschrift für Sozialwissenschaft, 1901. S.285. c. f. Bortkiewicz, Bevölkerungstheorie 1908. S.50.

4) Mombert, Studien zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland, 1907. S.275.

ザルナリ。而モ此等ノ場合、部分的集團ノ形成ハ常ニ貧富以外ノ他ノ標徴ニヨレル結果、吾人ハ
 タダ他ノ標徴ニヨリテ別タレタル各集團ノ平均的富力ト其平均出生率トヲ對立セシムルヲ得ルノ
 ミ。其二、社會ノ各成員ノ貧富ヲ知ルコトハ決シテ容易ナラズ、從ヒテ部分的集團ノ富力ノ大小
 ヲ決定シ表示スルニ當リテモ、貧富ノ程度其物ニヨリ難キ事多ク、カカル場合ニ、代フルニ、此
 程度ヲ示ス所ノ他ノ標徴ニ依ルハ事情已ヲ得ザルナリ。

此ノ如ク、二ノ方向ニ於ケル障碍ハ從來ノ統計材料ヲシテ必ズシモ模稜的ノモノナラシメズ、部
 分集團ノ形成ハ貧富以外ノ標準ニヨル事アリ、然ラザルコトアリ、貧富ノ判別ハ財産所得等ノ直
 接ナル標徴ニヨル事アリ、他ノ間接ナル標徴ニヨル事アリ。此區別ハ相交又スル性質ヲ有スルガ
 故ニ、既存ノ統計材料ハ之ヲ種々ニ區別スル事ヲ得可シ。然レドモ今姑ク第一障碍ニヨル區別ヲ
 看過シ去リタダ第二ノ障碍ニヨル區別、即チ標徴ノ直接ナル間接ナルカニヨル區別ノミヲ考ヘ
 テ、以下順次ニ從來既ニ存スル材料ヲ列擧セン (以下見出シニ掲グル人名ハ該統計ノ集計者ナルカ、又ハモシソ
 官廳ノ統計ヲ基礎トスル場合ニハ之ニ加工シ之ヲ利用シテ立
 論ノ料トナセ)
 (イ) 直接ニ貧富ト出生率トノ關係ヲ示セルモノ。

(A) J. Bertillon.

(a) 富力ノ區別

富力ノ區別	計	公生	私生	計	公生	私生
1、(貧)	102.6	120.8(143)*	66.8	126.0	111.3*(214)	87.7
富力ノ區別	計	公生	私生	計	公生	私生
富力ノ區別	計	公生	私生	計	公生	私生
富力ノ區別	計	公生	私生	計	公生	私生

5) Kaulmann; Theorien u. Methoden der Statistik. S.117 ff.
 6) J. Bertillon, La dépopulation de la France, 1911, p. 103, ditto, La natalité selon le degré d'aisance dans les grandes capitales européennes. Bulletin de l'Institut International de Statistique, IX, c. f. Mombert, a. a. O. S. 120. Journal of the Royal Statistical Society, 1906, p. 66

2	五五・七	二六・八	四〇・〇	五五・八	一四〇	一六五
3	五三・七	二二・六	三三・四	三三・七	一〇三	一五五
4	五三・六	二六・七	三六・七	二五・〇	一〇九	一五五
5	五三・四	二五・九	三三・五	二二・一	一〇九	一〇七
6	五三・一(65)*	二五・四	三三・八	二三・〇(121)*	九三	一〇一
平均	五〇・五	二二・二	三三・〇	二三・六	一〇六	一五二

(b) 佛蘭西ニ於ケル相續財産ト各家族ノ兒數。⁷⁾

一	一八九六年ニ於イテ二一乃至二五年ニ於ケル相續セル世帯ノ數	A	一八九八年ニ於ケル相續數	B	A	相續財産價額	各相續者一人當リ
一	一八・六八四		二五・六〇	四〇一	二・四四五		二・四四五
二	二四・九九		三二・三三	四三三	一三・七〇		一六・六〇
三	一七・三三		二七・三三	二六二	一八・八四		四三・九三
四	二七・二四		三六・〇一	四〇三	一一・〇一		二・七三
五	二六・六四		一八・四二	一〇二	一五・六四		二・九二
六	四〇・〇九		二・四二	一八	二・二二		一・二二
七以上	五三・三四		二・〇一	一三	二・〇三		一・六六

(B) A. Bertillon, 佛蘭西ニ於ケル土地所有ト出生率トノ關係(一八六二年)⁸⁾

ゾバアトマンノ數 人口千ニツキ土地所有者 人口千ニツキ出生

ゾ	二二	四七・七
リ	三三	三三・七
三	一三	三六・一

(C) Kiaer, 柏林ノ貧民區劃 Luisenstadt ト富有區劃 Dorotheenstadt トノ出生率比較(一八八五年)⁹⁾

結婚後二十五年ヲ經タルモノノ中	無子者	一子及ビ三子ノモノ	七子以上ヲ有スルモノ	十一子ヲ有スルモノ
Luisenstadt.	八・二%	一五・一	三三・四	二・六
Dorotheenstadt.	一一・%	一〇・一	三・六	三・一

(D) Verijn Stuart, めびすてゝだむニ於ケル所得ト出生率トノ關係。¹⁰⁾

7) Bertillon, Dépopulation. p. 106.

8) Levasseur, La population française. 1890. III. p.178.

9) Kiaer, Statistische Beiträge zur Beleuchtung der ehelichen Fruchtbarkeit. 1905. I. S. 86. Mombert, a. a. O. S. 146.

10) Verijn Stuart, Untersuchungen ü. d. Beziehungen zwischen Wohlstand. Na-

区市ノ區劃	人口千ニツキ所得稅納稅者(一九二一年)	所得額二千四百グ(一九二一年末)	出生率(一九二一年)
I	三三・〇	六・七	二八・三
II	五〇・〇	一五・六	二二・六
III	二五・〇	三〇・〇	一三・〇
IV	一五・〇	一五・〇	八・七
V	一三・一	一四・八	七・七
VI	一〇・九	一三・三	五・五
計	一〇〇	一〇〇	一〇〇

區劃	出生(一九〇一年)	平均價格	一人當リ所得稅	同上(三千馬克以上ニ對スル)
II, I, III.	一三	五・三	八・七	三〇・六
VI, IVa, NIIa.	一六一	五・三	八・七	三〇・六
IX, IVb, Xa.	一七〇	五・三	八・七	三〇・六
Va, VIIa, VIII	一七一	五・三	八・七	三〇・六
XI Vb, VIIIb.	一三三	五・三	八・七	三〇・六
XIIb, Xb, XIII.	一三三	五・三	八・七	三〇・六
Wolf.	一三三	五・三	八・七	三〇・六

行政區劃	人口千ニツキ出生	家族ノ所得(馬克)	行政區劃	人口千ニツキ出生	家族ノ所得(馬克)
みゆんすてる	一三・一	一三三	あいすばあでん	一三・〇	一三〇
わつへるん	一三・一	一三三	はのたふやる	一三・九	一三〇
ぶるわむへるん	一三・一	一三三	ほつたむ	一三・四	一三九
ほつたむ	一三・一	一三三	へるりいん	一三・一	一三九

行政區劃	人口千ニツキ出生	家族ノ所得(馬克)
デバアトマンノ數	一〇〇以上	一三三

論 說(二) 社會階級別ト出生率トノ關係 五 第二卷 第五號

11) Mombert, a. a. O. S. 824.
 12) Julius Wolf, Der Geburtenrückgang. Die Rationalisierung des Sexuallebens in unserer Zeit. 1912. S. 34.
 13) Bourisien, L'affaiblissement de la natalité en France. Revue Politique

R	150—100	11・8
10	135—150	11・8
11	100—135	13・8
111	75—100	14・5
12	50—75	14・9
11	25—50	16・5
1	5	18・1

(H) Tallquist. 同上 (一八七六—一八八〇年)¹⁴
 デバアトマンノ數 人口一人當リ相續財產(法) 一五—五〇歲ノ既婚女子百人ニツキ出生

10	46—55	13・0
R	31—46	11・7
11	25—31	11・9
RR	15—25	13・1
10	10R—111	12・8
R	11R—11R	14・1
2	11R—11R	16・3
R	120—120	14・9
2	111	13・1

(I) Passy. 巴里ニ於ケル貧富ト兒數トノ關係。

巴里ノあろんでいすまん中最富メル所ニテハ一婚姻ニツキ兒數一・九七、最貧シキ所ニテハ同ジク二・八六ナリ。勞働者ノミノ所ト富ニ於イテ第二位ニアル所トノ兒數ノ差ハ一・八七ナリ。

(J) Nitti. なほりノ區劃別出生率¹⁵

區 劃	一八八一年	一八八七年	一八九二年
Sanferdinando. (極富)	17・3	13・8	14・8
Vicaria. (極貧)	23・8	22・8	20・4
Fuorigrotta. (勞働者街)	26・6	21・1	20・1

(K) Niceforo. romeノ市ノ出生率¹⁶

14) Levasseur, op. cit. III. p.178.
 15) Nitti, Population and Social System. p.157.
 16) Niceforo, Les classes pauvres. 1905. p.123.

富有區	出生率	貧困區	出生率
Y	二・六	A	三・〇
Z	三・九	B	三・八
Z'	一・五	C	三・四
Z''	一・五	D	三・八
平均	一・三	E	三・四
		F	三・五
		G	三・八
		K	三・八

此他ナホ、Fetter in Dumont 18) Levasseur 19) ノ研究ノ如キ皆此部類ニ屬セシム可キモノナリ。

以上掲ゲ來レル統計ハ吾人ヲシテ、一目シテ、富力ト出生率トノ間ニ反比例的關係ノ存スル事ヲ認メシム。貧者ノ出生率ハ大ニシテ富者ノ出生率ハ小ナリ、加之、而シテ出生率ノ小ナル程度ハ富有ノ程度ニ應ジ、出生率ノ大ナル程度ハ貧困ノ程度ニ應ズ。此ノ如ク、貧富ト出生率トノ關係ヲ明ナラシムルニハ以上ノ材料ヲ以テナホ多キニ過グルガ如シ。而モ、從來ノ研究ニ係ル貴重ナル材料ニシテ、貧富ノ程度ヲ間接ニ示ス可キ他ノ標徴ヲ利用シタルモノ少カラズ。以下其重ナルモノヲ列擧シテ、ナホ參照比較ノ便ニ供セン。

(ロ) 物質的經濟的ナル標徴ニヨリテ間接ニ貧富ト出生率トノ關係ヲ示セルモノ (職業ヲ標徴トナセルモノヲ除ク)。

(A) Talquist. 佛國ニ於ケル動産稅ト出生率トノ關係 20)

デバアト マンノ數	動産稅及ビ窓戶稅 人口一人當リ(法)	既婚女子百 ニツキ出生	デバアト マンノ數	動産稅及ビ窓戶稅 人口一人當リ(法)	既婚女子百 ニツキ出生
10	0.51—1.21	33.45	9	1.21—1.41	22.18
11	1.21—1.41	28.06	8	1.41—1.71	16.66
9	1.41—1.71	15.84	10	1.71—2.01	12.33

17) Fetter, Versuch einer Bevölkerungslehre. 1894. S.54.
 18) Dumont, Dépopulation et civilisation. 1890 p.166.
 19) Levasseur, op. cit. passim.

(B)

Verijn Stuart. 和蘭ニ於ケル家賃ト出生率トノ關係(一九〇二年)²¹⁾

四十ノ地方自治體ヲ平均家賃ノ 各家族ノ 兒數
大小ニヨリテ分テタル集團 都市 村落 村數

10 二・三一二・四 一五・九四
10 二・六〇一・四・四 一四・七二
10 二・六一 五・六一
10 五・六一 五・一元
10 五・元 五・元
10 五・元 五・元

(C)

Newsholme and Stevenson. 倫敦ノ家賃ト出生率トノ關係(一九〇三年)²²⁾

區劃 家族百ニツ 出生率
*婢僕數 公生 私生 計 同上ノ倫敦ノ出生率ニ對スル割合
10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

IVIII 區劃 家族百ニツ 出生率
*婢僕數 公生 私生 計 同上ノ倫敦ノ出生率ニ對スル割合
VI 〇以上 二〇・四 〇・四 二〇・八 一〇〇・〇
V 二・六 二・六 二・六 一〇〇・一

大小ニヨリテ分テタル集團 都市 各家族ノ 兒數
村落 村數

10 二・三一二・四 一五・九四
10 二・六〇一・四・四 一四・七二
10 二・六一 五・六一
10 五・六一 五・一元
10 五・元 五・元

(a) (D)

獨逸大都市ニ於ケル家賃ト出生率(一九〇〇年)²³⁾

都市 區劃 出生率
公生 私生 計
10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

伯林 區劃 出生率
公生 私生 計
10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

平均家賃 三〇マアク以下 五百マアク以下
八・七三 六・三三 五・四三 五・三三 五・三三 五・三三 五・三三 五・三三

住居百ニツキ
一五・四五歳ノ女子千ニ
ツキ滿一歳以下ノ兒數
五・一 五・一 五・一 五・一 五・一 五・一 五・一 五・一

10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

10以下 三〇・六 三二・六 二八・八 五五・七
10-10 二二・八 一〇・二 二五・八 二二・二
10-20 二二・〇 〇・五 三三・四 六二・一
20-30 二二・三 〇・六 三五・〇 六二・七
30-40 二二・六 〇・六 三五・〇 六二・七

21) V. Stuart, a. a. O. cf. Mombert, Bevölkerungsbewegung, S. 133.
22) Newsholme and Stevenson, The Decline of Human Fertility in the United Kingdom and Other Countries. Journal of the Royal Statistical Society, 1906.

論 說 (二) 社會階級別ト出生率トノ關係 九

第二卷 第五號

V IV III II I

人口十萬以上ノ都市		人口千ニツキ預金帳ノ數	
出生率別地方 I 最高キ地方	29.6	22.1	21.1
II 高キ地方	25.5	21.2	21.2
III 普通ノ地方	23.7	20.2	21.1
IV 最低キ地方	20.3	19.7	20.8
V 最低キ地方	18.5	19.2	20.3
都市ニツイテ	23.2	19.5	20.3

(甲) 獨逸全國ニツイテ

出生率別地方	出生率	人口千ニツキ預金帳ノ數
I 最高キ地方	29.6	22.1
II 高キ地方	25.5	21.2
III 普通ノ地方	23.7	20.2
IV 最低キ地方	20.3	19.7
V 最低キ地方	18.5	19.2
都市ニツイテ	23.2	19.5

(乙) 獨逸ニ於ケル預金帳數ト出生率トノ關係(一九〇〇年)

出生率別地方	出生率	人口千ニツキ預金帳ノ數
I 最高キ地方	29.6	22.1
II 高キ地方	25.5	21.2
III 普通ノ地方	23.7	20.2
IV 最低キ地方	20.3	19.7
V 最低キ地方	18.5	19.2
都市ニツイテ	23.2	19.5

(b) 獨逸ニ於ケル預金帳數ト出生率トノ關係(一九〇〇年) 24)

階級	出生率	人口千ニツキ預金帳ノ數
らいぶちひ	30.9	22.8
A	32.1	24.4
G	27.7	20.0
F	27.7	21.2
E	27.7	21.2
D	27.7	21.2
C	27.7	21.2
B	27.7	21.2
I H G F E D C B A	19.5	19.5
女子千ニツキ	154.0	154.0
(二五〇ツク以下)	18.5	19.2

24) Mombert, Bevölkerungsbewegung. S. 175 ff. cf. Mombert, Ueber d. Rückgang etc. S. 822. Wolf, a. a. O. S. 37. Most, Bevölkerungswissenschaft. S. 50.

(E) Fetter.

(a) 伯林ニ於ケル家賃ト出生率トノ關係²⁵⁾
(一八九〇—九一年)家賃ト出生率

區	A	B	C	D	F	C	H	I	J
人口一ニツキ平均家賃	四三・五	四三・一	三三・六	三三・五	一七〇・五	一五二・六	一四八・五	一三三・五	一三三・七
出生率	一七・六	一七・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六
(一八八五年)婚姻全數ニ對スル一定見數ヲ有スル婚姻數ノ割合ト家賃トノ關係									

(b) 倫敦ニ於ケル家ノ大サト出生率(一八九一年)²⁶⁾

區	A	B	C	D	E
一室當リ一人以上ニシテ室數五ニ滿タサル住居ニスメル人口ノ割合	三六・七	四〇・〇	四七・一	五九・一	五八・〇
出生率	三三・六	三三・一	三三・三	三三・九	三二・四

(A) Del Vecchio. 伊太利ニ於ケル文字ノ有無ト出生率トノ關係²⁷⁾
(ハ) 非物質的(文化的)ナル標徴ニヨリテ間接ニ發當ト出生率トノ關係ヲ示セルモノ。

區	北部伊太利		中部伊太利		南部伊太利	
	a.	b.	a.	b.	a.	b.
文字無キモノノ數	六・六	四・八	三・八	三・七	三・八	三・八
文字無キモノノ數多キ地方	三・八	三・八	三・八	三・八	三・八	三・八
其普通ナル地方	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三
其少キ地方	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七

25) Fetter, a. a. O. S. 55.
26) Fetter, a. a. O. S. 57.
27) Salvatore del Vecchio, Su gli analfabeti e le nascite nelle virie parti d'Italia. 1894. cf. Niceforo, op. cit. 121. Wolf, a. a. O. S. 45. Mombert, a. a. O. S. 131.

區劃	人口百ニツキ讀書ノ能力ヲ有スル者ノ數	農業勞働者ノ平均勞銀(法)	人口千ニツキ出生	區劃	人口百ニツキ讀書ノ能力ヲ有スル者ノ數	農業勞働者ノ平均勞銀(法)	人口千ニツキ出生
DCBA	五九・四一	一・五〇	三三・二	E	五九・四一	一・五〇	三三・二
	五二・六七	一・八三	三二・七		五二・六七	一・八三	三二・七
	五一・六八	一・六五	三二・二		五一・六八	一・六五	三二・二
	五七・六六	一・六三	二九・五		五七・六六	一・六三	二九・五
	五八・四七	一・四四	二九・八		五八・四七	一・四四	二九・八
(C) Brownell	北米合衆國ニ於ケル神經病ト出生率トノ關係(一八八〇年) ²⁰⁾						
A 洲及地方	1	2	3	4	5	6	7
B 一五—四九歳ノ女子千ニツキ出生原因ノ知レタル死	一六・九	一〇・〇	一八・七	一七・一	一七・九	一七・〇	一七・三
C 亡千ニツキ神經病ニヨル死亡	八〇・一	一〇三・九	一〇一・九	八七・〇	八〇・〇	七五・九	一〇三・二
	16	17	18	19	20	21	22
	一四七・七	一五三・四	一五二・七	一四八・五	一四七・三	一四三・四	一四三・〇
	五九・一	九一・七	八八・六	一〇四・五	一〇三・四	一一〇・三	一一〇・六
	51	32	33	34	35	36	37
	一三三・四	一三三・二	一三三・一	一三三・七	一三三・四	一三三・三	一三三・六
	二二・六	八二・二	二六・八	九八・八	一〇九・〇	一三〇・七	一三三・六
	46	47	48	1—8	9—16	17—24	25—32
	八三・九	八一・一	七三・三	一七・五	一七・七	一四・六	一三・三
	三〇・九	二二・三	二七・五	八・八	八・二	一〇・四	一一・〇
	11	12	13	14	15	16	17
	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五
	38	39	40	41	42	43	44
	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五
	45	46	47	48	49	50	51
	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五	一〇三・五

(A) 職業別ノ標徴ニヨリテ間接ニ貧富ト出生率トノ關係ヲ示セルモノ。
 職業ト出生率トノ關係ニ關スル研究ハ其數極メテ多シ。茲ニハタダ其中、從來ノ學者ニヨリテ貧富ト出生率トノ關係ヲ示サントシテ利用セラレタルガ爲ニ特ニ注意ス可キモノノミヲ擧ク。

Rubin und Westergaard. *ソウェーデン*ニ於ケル職業別出生率(一八八〇年)³⁰⁾

職業部類 婚姻期間 五年以下 五年—九年 一〇年—十四年 十五年—二十四年 二十五年以上

I. 〇・九二 二・九二 五・二〇 九・二四 一四・八〇

論說(二) 社會階級別ト出生率トノ關係 一一 第二卷 第五號

20) Mombert, a. a. O. S. 134. cf. Brownell, The Significance of a Decreasing Birthrate. Publications of the American Academy of Pol. & Soc. Science. Nr. 124.

計 V	一・九三	二・二七	二・四三	二・九一	三・三三	三・七〇	四・一六	四・七〇	五・一六	五・七〇	六・一六	六・七〇	七・一六	七・七〇	八・一六	八・七〇	九・一六	九・七〇	一〇・一六	一〇・七〇	一一・一六	一一・七〇	一二・一六	一二・七〇
IV III II	二・五三	二・九三	三・三三	三・七三	四・一三	四・五三	四・九三	五・三三	五・七三	六・一三	六・五三	六・九三	七・三三	七・七三	八・一三	八・五三	八・九三	九・三三	九・七三	一〇・一三	一〇・五三	一〇・九三	一一・三三	一一・七三

此統計ハ當時コトヘンハあげンニ存在シタル婚姻數三萬四千七十五ニ就キテ得ラレタルモノナリ
各職業部類ハ重ニ次ノ如キモノヲ含ム。

I、官吏、辯護士、其他ノ自由職業者、工場主、銀行家等。II、手工業者、小賣商、船員、酒店ノ主人等。III、教師、音樂者、帳簿方、手代等。IV、下級官吏、奴僕、ボオイ等。V、徒弟、工場勞働者、日傭人夫、水夫等。

(B) Fahlbeck: 教授ノ出生率³¹⁾

婚姻期間	〇—二年	二—五年	五—一〇年	一〇—一五年	一五—二〇年	二〇—二五年	二五年以上	計
婚姻數	311	114	155	155	155	111	104	311
兒數	3	103	152	152	152	103	103	211
一婚姻ニツキ兒數	〇・11	0・91	1・00	1・00	1・00	0・93	0・99	0・95
於ケルI部類ノ同上	0・92	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00
瑞典貴族ノ同上	0・91	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00	1・00

(C) Steinmetz: 能才ノ兒數ト其父ノ兒數トノ比較³²⁾

滿五十歲以上ノ能才ノ家族ニツキ兒數	4・6	其父ノ兒數	7
大學教授	5・0		6
藝術家	5・0		6
官吏	5・0		6
商人	5・0		7

(D) Gassl: みゆん(人)ニ於ケル職業ト出生率トノ關係(一八九五年)³³⁾

有産者	10・57	出生率ノ割合%	18・7	出生ノ割合ノ超過約	11・0
所屬人口ノ割合%	10・57				

31) Fahlbeck, Der Adel Schwedens. 1903. S. 255. cf. Wolf, a. a. O. S. 43.
Mombert, a. a. O. S. 143.
32) Steinmetz, Der Nachwuchs der Begabten. Zeitschrift für Sozialwissenschaft

三、生物學的說明

此等統計ノ數字ニ表ヘタル貧富ト出生率トノ反比例的關係ハ其由リテ來ル所如何。此關係ハ吾人ノ意志ヨリ全ク獨立ナル生物學的事情ニヨリテ生ズルニ非ザルカトハ容易ニ念頭ニ浮ビ來ル疑問ナリ。

出生率ハ女子ノ妊孕力以外ノ種々ナル事情ニヨリテ作用セラル可シ。社會ノ年齡構成、男女數ノ割合、婚姻率、婚姻期間等ハ皆出生率ノ大小ニ影響ス。然レドモコレラノ事情ニヨリテ出生率ニ變動ヲ生ズルコトアリトモ、其變動ハタダ一ノ視的錯覺タルニ止マリテ、女子ノ妊孕力ソノモノノ變動ヲ示スモノニ非ス。上ニ掲ゲタル數多ノ計表ハ全人口ニ對スル出生率ヲ示スノミナラス、妊孕能力アル女子ニ對スル出生率ヲ示セルガ故ニ、ソハ明ニ貧富ノ間ニ存スル妊孕力其物ノ差異ヲ示セリト云フ可シ。而シテ、此差異カ、生物學的事情ニ基ク所ナキカト考フルニ及ビテハ、吾人ハ先ヅ Doubleday 説ヲ想起³⁴⁾セザルヲ得ザルナリ。彼ニヨレバ他ノ動物及ビ植物ニ於ケルト同ジク人類ニアリテモ、『過良ノ營養ハ増加ヲ阻害ス、之ニ反シテ、食物ノ制限又ハ不足ハ之ヲ助長ス』。換言スレバ、營養ノ過良ハ生物ノ生殖力ヲ損フモノナリ。彼ノ學說ハ動植物ノ栽培及ビ飼養ノ實例ノ上ニ數多ノ事實の基礎ヲ有スルモノ、其主張其ノモノノ中ニハ動カス可カラザル核心ノ存ス

34) Wolf, a. a. O. S. 7.

35) Doubleday, True law of Population. 1841.

ル事疑フ可カラザルナリ。然レドモ、ソガ人類殊ニ現代ノ文明人ニ於イテ如何ナル程度マデ妊娠力減少ノ作用ヲナセリヤ、此程度如何ハ到底理論的ニ決定シ難キコトナリ。生理的妊娠能力ノ極限ニ於イテ妊娠スル事自然界ノ動植物ノ如クナラズ、僅ニ五六兒ヲ舉グル人類ニ於イテハ、其作用殆ンド無キガ如クニ微ナラザルカ、幾百年間最モ豊富ナル營養ニ飽ケル英國ノ貴族ガ高キ出生率ヲ示シタル事實ハ之ヲ否定スルモノニ非ザルカ、此邊ノ消息容易ニ斷定シ難シ。³⁶⁾ 彼ノ思想ヲ批評シテ、之ヲ改造シ完成シ、新ニ一家ノ説ヲナシタル Spencer ハ重キヲ營養ニ置カズシテ知力ニ置ケリ。³⁷⁾ 謂ヘラク、有機體ハ其高等ナルモノニ進ムニ連レテ生殖力ヲ減ズ、コハ一般動植物ニ於ケルト人類ニ於ケルト別ツ所無シ。自然ハ生物ニ一定ノ力ヲ賦與シタリ。此力ヲ精神の活動ニ分ツ事ノ大ナル程、生殖能力ニ殘ス所僅ナリ。カクテ、知力ノ發達シテ文明ノ高キ程出生率ハ減ズ可シ。³⁸⁾ 吾人ハマタ、此説ニ於テモ爭フ可カラザル核心ノ存スルヲ見ル。精出ノ幾億、人卵ノ幾萬ト云フ數ヲ云爲シテ之ヲ全然否定セントスル論者ニ左袒スル能ハザルノミナラズ、多數ノ子女ヲ生メル一タノ文化的偉人ノ例ヲ枚擧シテ之ヲ駁セントスル多クノ非統計學的論證⁴⁰⁾ニ服スル事能ハズ。然レドモ吾人ノ見ル所ヲ以テズレバ、Doubleday, Spencer 共ニ事實ノ一面ヲ見タリ、眞ニ出生率ヲ減ゼシムルモノハ自然ニ反セル生活ニアリ。知力ノ發達ト過度ノ營養トガ妊娠能力ヲ減衰セシムルモノハ、ソガタダ「人爲」ノ多クヲ含ムニヨル。人爲ヲ加フルハ、コレ其生物ガ幾萬ノ世代ヲ通ジテ適應シ來レル環境、即チ自然ヲ損フ所以ナリ。而シテ、一切ノ環境ノ變化ガ生殖力ヲ損ズル特別ノ作用ヲ有スル事ハ夙ニ Darwin ノ明言セル所ナリトス。⁴¹⁾ 此ノ如ク Doubleday-Spencer

36) Most, a. a. O. S. 45. Wolf, a. a. O. S. 29. Newsholme and Stevenson, op.cit., p. 31. Loria, Morphologie sociale, p. 78. Borkiewicz, a. a. O. S. 53.

37) Apencer, A Theory of Population deduced from the General Law of Animal Fertility. 1852.

38) Most, a. a. O. S. 45. Mombert, a. a. O. S. 164. Alfred Nossig, Ueber die Bevölkerung Kosmos 1887.

説ハ兎ニ角ニ争フ可カラザル一ノ核心ヲ有ス。富力ノ特ニ大ナル階級ニ於イテ出生率ノ小ナル事實ハ、少クトモ其一小部分ニテモ、之ニヨリテ説明セラレザル可カラズ。然レドモ、營養ノ過良知力ノ發達等、要スルニ人爲ト云フモノガ、如何ナル程度マデ出生率減少ニ與リテ力アルカハ、到底抽象的演繹ニヨリテ決定シ得可カラザル問題ナリ。

福利ノ増進文明ノ進歩ニ伴ヒテ性欲ノ強度ヲ減ジ、其結果、出生率ノ減少ノ來ス可シトナシテ、心理的方面ノミニ注目ノ範圍ヲ限リタル點ニ於イテハ明ニ其特徴ヲ有スルモ、歸趣ヲ Spencer 説ト一ニスル部分ヲ含ムモノハ Brentano 説ナリ。謂ヘラク、福利ノ増進ニ伴ヒテ人人ノ欲望、從ヒテ其満足ヲ意味スル享樂ハ頗ル其種類ヲ加フ。じつせんノ法則ニ遵ヒテ享樂ノ最大總量ヲ得ントスル吾人ハ自ラ新ナル欲望ノ満足ノタメニ舊クヨリ存シタル享樂ノ一部ヲ斷念セザル可カラズ。即チ従前ノ享樂ハ其價值ヲ減ズル譯ナリ。此道理ニヨリテ、まるさずガ殆ンド恒常ニシテ變ズル事ナシトナセル性欲モ福利ニ反比例シテ其強サヲ減ズルニ至ル。福利ノ特ニ大ナル社會ノ上流ニアリテハカクテ自ラ、享樂ノ數ノ増加ニ伴ヒテ性欲ノ下級ニ於ケルヨリモ遙ニ弱キヲ見ル。文明ノ進歩ハマタ漸次同様ニ全社會成員ノ性欲ヲ減ゼシムルナリ。⁴²⁾

此意見ハ理論モ事實モ吾人ヲシテ兩性間ノ激情ノ社會ノ進歩ト共ニ減衰スル事ヲ信ゼシムル能ハズト説ケルまるさずノ意見ト相容レズ、⁴³⁾福利ノ間斷ナキ進歩ガ事實ナル以上ハ、ソガまるさずノ立論ニ動搖ヲ與ヘ得ル可能アル事ハカノ Doubleday-Spencer 説ト異ナル事ナシ。Dietzel ノ之ヲ以テまるさず説ニ對スル非難トシテハ何ノ打撃ニモ非ズトナセル、頗ル解シ難キニ似タリ。⁴⁴⁾ソハ何

42) Brentano, The Doctrine of Malthus and the Increase of Population during the last Decade. Econ. Journal 1910. ditto, Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Dezenien. 1909. cf. Wolf, a. a. O. S. 31. Borkiewicz, a. a. O. S. 53. Mombert, a. a. O. S. 164.

43) Malthus, Population. 7ed. 1872. p. 515. cf. Fetter, a. a. O. S. 12. Borkiewicz, a. a. O. S. 53.

44)

レトモアレ、此意見ヲ以テ或ハ科學的基礎ヲ缺グトナシ、或ハ任意ノ想定ナリトナスモノアリ、⁴⁵⁾進ミテハ Brouilhet ノ如キ又ハ Wolf⁴⁶⁾ノ如キ、文明ノ進歩ト共ニ性欲的享樂ノ追求ハ其勢ヲ加フトナス者アルニ至ル。吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ、吾人ニ内在スル一原力、欲望ノ總量ハ變化セズ、而モ其種類ヲ増加セシムル時既存ノ欲望ノ強度ヲ減ズル事ハ自然ノ徑路ナリ。タダ今日ノ文明社會又ハ上流階級ニ於イテ性欲ガ特ニ多クノ意義ヲ有スルモノハ、⁴⁹⁾ソガ其勢ヲ強メタルガ故ニ非ズ、從來ハ性欲ト關係ナカリシ諸般ノ事象ガ性欲化シタルニヨル、性欲ハ大別シテ、性交欲、生殖欲ノ二トナス事ヲ得可シ。而モ、Ward⁵⁰⁾ノ所謂自然愛ガ浪漫的愛ヲ分化セシムルニ伴ヒテ、欲望ノ方面ニ於イテハ性交欲ヨリ男女ノ接觸交際ヲ求ムル欲望ヲ生ジ、此派生セラレタル欲望ノ參加ニヨリテ數多ノ事象ノ性欲化ハ生ジタリ。而モ性欲ノ中心タル性交欲ニ至リテハ之ニ伴ヒテ其勢ヲ減ゼザル能ハザルナリ。カクノ如ク、福利ノ増進ハ自ラ性欲ノ減衰ヲ伴フ可ク、其結果多少トモ出生率減少ノ勢ヲ伴ハン。出生率減少ノ全然意識的ナラザル點ニ於イテ、Doubleday-Spencerノ法則ノ作用スル所ト趣ヲ同ジクシ方向ヲ一ニス。

福利ノ増進、即チ物質的幸福ノ増進ハ、カクテ、無意識的ニ、即チ自動的生物學的ニ、多少トモ出生率ヲ減少セシメ、其結果貧富間ニ於ケル出生率ノ差異ヲ生ゼシメ居ラン。而モ此減少ノ程度如何、之ヲ知ルニ非ザレバ、今日事實ニ見ル出生率ノ差異ノ果シテ幾分ガ他ノ重大ナル原因ニ負フモノナルカラ判定スル事能ハズ。而モ此區別ハ甚ダ困難ニシテ殆ンド絶望的ナル研究題目ナリ。

45) Bortkiewicz, a. a. O. 53. 46) Wagner, Agrar-u. Industriestaat. S. 51.

47) Brouilhet, Précis d'éc. pol. 1912. p. 10

48) Wolf, a. a. O. S. 31.

49) Malthus, Essay. Book IV. chap. I. 444.

50) Ward, Pure Sociology.

吾人ハ敢テ次ノ如キ試ミヲ行ハント欲ス。人爲的ナル出生制限ノ未ダ行ヘレズ、從ヒテ無意識的ナル生物學的法則ノ作用ニヨリテノミ、上級ノ出生ノ減少セリト考ヘラルル社會ニツキ、貧富間ノ出生率ノ差異ヲ求メ來ラバ、以テ福利ニ伴フ出生率ノ無意識的減少率ヲ知り得可シ。之ヲ人爲的出生制限ノ行ハルル社會ニ於ケル貧富間ノ出生率ノ差異ヨリ除キ去ル事ヲ得バ、其殘量ニヨリテ所謂人爲的制限ニ伴フ出生率ノ差異ヲ知ル事ヲ得ン。サハレ、コハーノ計劃ノミ。事實ノ計數ハ容易ニ之ヲ遂行ヒシメズ、此差異ノ揣摩の概數ヲ得來ル事スラ甚ダ困難ナリ。タダ幸ニ我國ニ於イテ、人爲的ナル出生制限(少クトモ近代の意義ニ於ケル)ノ殆ンド行ハレザル社會ヲ見、マタ上下貧富ノ懸隔ノ西歐文明國ト相近キ程度ニ達セル社會ヲ見ル。然ラバ、日本ニ於イテ、貧富間ノ出生率ノ差異ヲ見ル事ハ研究上最モ有益ニシテ、必要ナリト云ハザル可カラズ。然レドモ今、一定ノ人口ヲ其富ノ程度ニヨリテ部分的集團ニ分チ、ソレゾレノ出生率ヲ見ルト云フ模型的方法ハ行ヒ得可クモアラズ、一二ノ大都市ニ就イテ、小區劃別ノ富力ト出生率トヲ比較スルコトハ、吾人ガ現在利用シ得ル所ノ唯一方法ナリ。東京大阪京都名古屋神戸橫濱ノ六大都市ノ中京都橫濱二市ハ各小區劃別ノ出生率ノ公表セラレタルモノ無シ。マタ富ノ程度ノ標徴トシテモ、多クハ僅ニ議員選舉權ヲ有スルモノノ人口ニ對スル割合ヲ知ル事ヲ得タルノミ。

東京市(大正二年)⁵¹⁾

區名	出生率
1. 本所	39.9
2. 小石川	39.9
3. 淺草	35.5
4. 芝	35.7
5. 麻布	35.7
6. 本郷	35.0
7. 四谷	35.5
8. 深川	35.5
9. 京橋	35.6
10. 下谷	35.5
11. 赤阪	35.3
12. 麴町	35.0
13. 牛込	35.9
14. 神田	35.5
15. 日本橋	35.9

論說(二)

社會階級別ト出生率トノ關係

一七

第二卷

第五號

51) 東京市統計書

B	市會議員選舉有權者人口百ニツキ	二・六	二・〇〇	二・八五	三・〇〇	二・八九	二・五五	一・八四	二・九	二・八四	三・七〇	三・七一	四・四三
C	府會議員同上	二・七	一・九	二・七七	二・六	二・九	二・七	一・五	二・五	一・九四	三・六	三・九七	二・八
	算術的平均	1.2.3	4.5.6	7.8.9	10.11.12	13.14.15	2.7.8.9.10.	1.3.5.6.13.	4.11.12.14.15.				

A 10.7 17.4 14.1 13.4 10.0 5.9 3.5 3.3
 B 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1
 C 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1 11.1

此表ニ就イテ見ルモ我國ニ於ケル貧富ト出生率トノ關係ハ西歐諸國ニ於ケルガ如ク明ナラス。前節(D) Mombert ノ表ニ見タルガ如ク、富力ノ大小ニ對シテ出生率ノ反比例スルガ如キ關係ハ之ヲ認ム可カラザルナリ。然レドモタダ特ニ富有ナル區ニ於イテ出生率ノ小ナル事實ノミハ明ニ知り得ラル。富有ニシテ出生率小ナル數區ノ出生率平均(二〇・〇)ト其大ナル數區ノ平均(三〇・四)トノ差ノ、後者ニ對スル割合ハ約三〇%ナリ。大阪市ニ就イテハ、小ナル區劃ニ就イテ出生率ヲ知ルヲ得ザレドモ、四區ノ別ニ就イテ見レバ貧富ト出生率間ノ關係ヲ知ル事ヲ得。而モ區劃ノ餘リニ大ナルガ故ニ、此關係ハ著シク現ハレズ。(註)

大阪市(大正元年) 南區 北區 西區 東區

出生率	19.1	18.5	17.7	17.7
衆議院議員選舉有權者數比例	16.6	14.5	18.5	15.5

(註) 我國ニ於イテハ貧民ノ出生率サシテ大ナラズト考ヘラル。東京市ノ中、下谷深川ノ出生率ハ寧ロ小ナル方ニアリ。大阪南區ノ出生率亦著シク東區ト異ナラズ。思フニ我國ニ於イテハ中下二級ノ出生率ニハ甚シキ差異ナカラン。從ヒテ、區別ノ出生率ハ貧富ノ程度ニヨリテモ、人口密度、年齡構成等他ノ事情ニヨリテ決セラルル事更ニ大ナルニ非ザルカ、神戸名古屋ニ市ノ統計ハ貧富ト出生率トノ關係ヲ示ス事少シ。カクテ我國ニ於イテハ出生率ノ大ナル事ヲ貧民ノ特徵ト考フルハ當ラザルニ似タリ⁵²⁾。但シコレラノ點ニ關スル此研究ハナホ極メテ粗雜、更ニ材料ヲ集メテ修訂セサル可カラズ。

52) 大阪市統計書
 53) Niceforo, op. cit, p. goet seq.

神戸市(大正二年)⁵⁴

林田 葺合 湊 湊西 神戸 湊東

東 西 中 南

名古屋市(大正元年)⁵⁵⁾

人口千ニツキ出生

三・五 三・六 三・三

三・六 三・七 三・七

同上

三・七 三・六 三・七 三・七

東京市ハ其統計書ニ載スル所上下二區二分テルノミニシテ、タタ富有ナル下京ノ出生率上京ヨリモ小ナル事ヲ知り得ルノミ⁵⁶⁾

東京市ハ其統計書ニ載スル所上下二區二分テルノミニシテ、タタ富有ナル下京ノ出生率上京ヨリモ小ナル事ヲ知り得ルノミ⁵⁶⁾

東京市ハ其統計書ニ載スル所上下二區二分テルノミニシテ、タタ富有ナル下京ノ出生率上京ヨリモ小ナル事ヲ知り得ルノミ⁵⁶⁾

東京市ハ其統計書ニ載スル所上下二區二分テルノミニシテ、タタ富有ナル下京ノ出生率上京ヨリモ小ナル事ヲ知り得ルノミ⁵⁶⁾

東京市ハ其統計書ニ載スル所上下二區二分テルノミニシテ、タタ富有ナル下京ノ出生率上京ヨリモ小ナル事ヲ知り得ルノミ⁵⁶⁾

是ニ由リテ見ルニ、貧富ノ差異ニ伴ヒテ、無意識的の非人爲的ニ生ジ來ル出生率ノ差異ハカカル計算法ニヨリテ現ハルル所、多クモ二三〇%ニ過ギザラン⁵⁷⁾ Zimm⁵⁸⁾ガなほりノ區劃ニ就イテ試ミタル同種ノ研究ニヨルニ、一八八一年末ダ伊太利ニ於イテ人爲的出生制限ノ廣ク行ハレザル時ニ當リ貧富兩區ノ出生率ノ差同ジク二〇乃至三〇%ニ過ギザリシ事ハ之ト相一致スル事實ナリ。然ルニ爾後歐洲ニ於ケル此差異ハ益甚シキヲ加ヘ、今日ニ於イテハ五〇%乃至七〇%ノ大サニ達セルヲ見ルナリ。カク百分率ヲ以テ此差異ヲ表示スル事ノ當否ハ別問題トシテ、兎ニ角其大サノ増加セル事ハ爭フ可カラズ。Mombert⁵⁹⁾ガ伯林ノ各區劃ノ家賃ト出生率、所得稅ト出生率ノ關係ニ就イテ得タル結果ハ共ニ約五〇%ニシテ、漢堡ニツイテハ五三%、らいぶちひニ就イテハ七二%、みゆんへんニ就イテハ七五%ナリ⁵³⁾ Zimm⁵³⁾ノ述ブル所ニヨルモ、なほりニ於ケル貧富出生率ノ差異ハ漸次著シキヲ加ヘテ一八九年既ニ五〇%ニ及ベルヲ見ル⁵⁹⁾ Hagon⁶⁰⁾ガ貧困ト高キ出生率トノ關係ガ一八五〇年以後五十年間ニ其強度ヲ倍加スルニ至レリト云ヘルモ、亦正ニ同一ノ事實ヲ示セリ⁶⁰⁾ 然ラバ今日西歐ノ諸國ニ見ル貧富ノ出生率ニ於ケル差異ノ大部分ハ到底之ヲ以テ貧富ノ差別ヨリ無意識的ニ發生シ來ルモノト見ル可カラズ。其由リテ起ル所ハ人爲的ナル出生制限ニアリ。殊ニ中級ト下級トノ間ニハ、無意識的ニ生ズル出生率ノ差異極メテ少キガ如ク、其間ニ存スル出生率ノ差異

54) 神戸市統計書

55) 名古屋市統計書

56) 京都市統計書

57) Nitti, Population, p. 157. 58) Mombert, Bevölkerungsbewegung, Newsholme and Stevenson, op. cit. p. 43. David Heron, On the Relation of Fertility in Man to Social Status, and on the Changes during the Last

S. 149 ff. the Last

ハ殆ンド全ク出生制限ニ負フモノナラザルベカラズ。コノ事實ハ總テノ學者ノ確認スル所ニシテ今更何等ノ論證ヲ要セザル所ナリ。⁶⁰⁾ 然ラバ此出生制限ノ原因如何⁶¹⁾。

(註) David Heron、如キハ一八五〇年ニ於ケル倫敦ノ貧富出生率ノ差異ヲ以テ女子ノ平均壽命ノ差異ヨリ説明シ識シ得可シトナシタリ。⁶¹⁾ 今此說ニ對シテ論駁ヲ試ミル便宜ヲ有セザレドモ、上ニ述ベタル三〇%ノ數字ヲ以テ假ニ事實ヲ表ハセルモノトナスモ、ソハ決シテ、識クだぶるでい、すべんさあノ法則ノ影響ナリトハ信ズ可カラズ。此年齡構成ノ差異ニ、在るでんべるく等ノ力説スル都市の性質ノ差異更ニハマタ、上級ニ多キ花柳病ノ影響等ノ協働セルコトヲ否ム可カラズ。タダ吾人ハ一切ノ人為的制限ニヨラザル差異が約二—三〇%ニシテ、從ヒテたぶるでい、すべんさあ法則ノ影響ニヨル差異モ極限ニ於イテコノ量ヲ越エズト主張スルノミ。

四、力ノ欲望

此出生制限ノ原因ヲ以テ吾人ハコレ力ノ欲望ナリト云フ事ヲ得可シ。力ノ欲望トハ自己ノ優勝ト此優勝ノ誇示トヲ欲スル欲望ナリ。權勢、富力、名譽、知力、其他如何ナル種類ノ力ニ於ケルヲ問ハズ、專念自己ノ他人ニ優レン事ヲ欲シ、マタ其優秀ノ他人ニヨリテ認メラレン事ヲ欲スルハ、近代文明ト共ニ著シク發達シ來レル欲望ニシテ、出生制限モ亦他ノ文明的病弊ト共ニ、等シク此欲望ヨリ出デ來レリ。⁶²⁾ 此欲望ノ出生制限ヲ生ズルヤニノ方面ヨリス。一ハ自身ノ榮達向上ヲ計ラントシテ、其努力ノ障礙タル可キ産兒數ヲ制限スルニ至ル事、二ハ産兒ニ成ル可ク都合ヨキ生活條件ヲ與ヘ社會ノ高地位ニ上ラシメンガ爲ニ、同ジク産兒數ヲ制限スル事コレナリ。此二方向ノ何レガ強ク作用スルカハ、父タル人ノ社會的地位如何、職業如何、特ニ所得ノ泉源如何ニヨリ

61) Heron, op.cit. 62) Oldenberg, op. cit. 63) Brentano, op. cit, p. 385.
63) Dumont, Dépopulation et civilisation 189c. Oldenberg, a. a. O. II. S. 128.
Mombert, Ueber den Rückgang etc. S. 832 ff.

ヲ決定セラルルモ、多クノ場合ニ方向ノ協働ヲ見ザル事無シ。カクテ力ノ欲望ハ出生制限ヲ生ジ、從ヒテ出生制限ニ負フ所ノ貧富ニヨル出生率ノ差異ヲ來セリ。

出生率減少ノ原因、從ヒテ、出生制限ノ原因ニ關シテハ多數ノ提説アルニ拘ハラズ、吾人ハ此力ノ欲望ヲ以テ之ニ擬スルノ最モ正鵠ヲ得タルヲ信ズ。コレ實ニ Dumont ノ所謂 *capillarité sociale* ト其本質ヲ一ニセルモノナリ。此社會的毛管現象ト云フハ次ノ如シ。

「社會ノ各分子タル個人ハ、己ム可カラザル本能ニ支配セラレ、其全力ヲ擧ゲテ不斷ニ彼ヲ吸引スル理想ノ光ノ方ニ上ラントス。同胞ニ對シテハタダ之ニ勝レ超エントノミカムルナリ。其狀恰モ石油ガ洋燈ノ心ヲ傳ヒ上ルガ如シ、光愈明ニシテ此毛管現象ハ益強キヲ加フ」⁶⁴⁾ 此社會的毛管現象即チ力ノ欲望ガ出生制限ノ原因ナル事ハ既ニ述ベタルガ如クナルモ、ソハ如何ニシテ貧富ノ出生率ノ差異ヲ招致スルヤ、曰ク、タダソガ貧者ニ於イテ作用スル事ノ乏シキニヨルナリ。吾人ノ欲望ニハ常ニ潛勢のナルモノト現勢のナルモノトノ區別アリ、一ハ明確ニシテ強烈、直ニ吾人ノ行動ヲ支配ス。他ハ漠然トシテ微弱、意識ノ奥ニ隱レテ吾人ノ行動ヲ左右スル事弱シ。此區別ハ一ニ、其目的ニ到達スル事ノ可能ナリヤ否ヤト云フ事ヨリ來ル。到達ノ到底見込ナキ場合ニ、其欲望ハ潛勢のナリ、到達ノ見込充分ナル時ソノ欲望ハ現勢のナリ。最下級ノ貧民ニアリテハ日々タダ衣食ノ資ニ汲々トシテ、社會ノ高キ階段ニ昇ラン事ハ甚ダ望少シ。カルガ故ニ、彼ガ事實ノ行動ハ力ノ欲望ニ左右セラルル事乏シキナリ。社會ニ於イテ一定ノ高キ地位ヲ占メ、其努力ニ從ヒテ更ニ高キニ昇リ得クバ、力ノ欲望ハ愈現勢のトナラン。⁶⁵⁾ カクテ、出生制限ハ下級ニ微ニシテ上

64) Wolf, a.a.O. S. 54.

65) Dumont, *Dépopulation et civilisation*. p. 106.

66) Fetter, a.a. O. S. 91.

級ニ於ケル程著シキヲ見ル。コレ出生制限ガ貧富ニヨル出生率ノ差異ヲ來ス所以ナリ。

前ニ掲ゲタルガ如ク、西歐ノ文明國ニ於イテハ、貧富ノ間常ニ著シキ出生率ノ差異アルノミナラズ、此差異ハマタ貧富ノ程度ト略相比例セルヲ見ル。換言スレハ富力ノ大ナル所出生率亦小ニ、前者少シク下レバ後者亦之ニ伴ヒテ少シク上ル。所謂福利說ノ反對者ハシキリニ其統計ノ不備ヲ責メテ非難スルモ、吾人ノ見所ニヨレバ、大體ニ於イテ此ノ現象ハ是認セラレザルベカラズ。而シテ此現象ハ出生制限ガ力ノ欲望ニ負フモノト考フルニ於イテ寧ロ當然ノ事實ナリ。貧富ノ出生率ガ人爲的ナル出生制限ニ負ハズ、從ヒテ力ノ欲望ニ疎タザル場合、例ヘバ我國ノ如キニ於イテハ、カカル事實ナクシテ、中下ノ兩級ノ出生率ハ略相近キヲ常トス。力ノ欲望ノ出生率ノ上ニ作用スル場合ニ於イテハ然ラズ。此欲望ガ實際ノ行動ヲ左右スルガ爲ニハソガ現勢的トナリテ生キ生キト感ゼラルルヲ要シ、此現勢的トナル程度ハ其満足可能ノ大サニ伴フ。富力ノ大ナル階級ニアルモノ程、更ニ高キ地位ニ上リ得ル見込大ナルノミナラズ、現在ノ地位ガ既ニ其力ノ欲望ヲ満足セシムル事大ナリ。カクテ、其地位ヲ失ハズ、進ミテハ向上セントノ欲望愈強カラザルヲ得ズ。出生ノ制限ココニ於イテ益強カラシム。タダ此際注意ヲ要スルハ最上級及ビ最下級ニ於ケル出生制限ノ事實コレナリ。

社會ノ最上級ニ於イテハ充分ニ力ノ欲望ノ飽滿ヲ味フ事ヲ得可ク、マタ多數ノ兒女ヲ擧グルモ、自己ノ地位ヲ危クセズ、且ツ彼等ノ將來ニ憂フ可キ事少シ。カクテ出生制限ノ理由ハ殆んど存在セザルカ、又ハ微弱ナリ。コレ最モ上流ノ社會ニ於イテハ出生制限ノ比較的ニ強カラザル所以ナ

67) cf. Fetter, a.a. O. S. 61.

ン。Leroy-Beaulieu ハ云フ、吾人ノ信ズ、佛蘭西ノ有産者階級中、其高キモノハ其低キモノヨリ
 モ兒數多シト⁶⁸⁾ Lagneau ハマタ佛國ニ就イテ、其大商人、大工業家、大地主ハ數多ノ子ヲ有スルヲ恐
 レズト云ヘルガ、獨逸ニ就イテモ亦然リ。Félice ハ又曰ク、Le Pas-de-Calais, le Nord et le Rhône ニテ
 ハ最モ多數ノ子ヲ有スル世帯ハ即チ最モ富メル世帯ナリト⁶⁹⁾。此最高ノ富者ニ對シテ、社會ノ他ノ
 一端ヲ形レル下級ハ如何ト云フニ、彼等ガ力ノ欲望ニ驅ラルル事ノ少キ次第ハ既ニ述ベタルガ如
 シ。而モ、今日ノ無産者勞働者ヲ擧ゲテ出生制限ヲ知ラザル者トナサバ、ソハ明ナル誤謬ナリ。
 出生制限ノ傾向ハ漸次彼等ノ間ニモ浸潤シツツアリ、之ナクバ今日ノ著シキ出生減少及ビ其速度
 ノ増進ハ決シテ生ジ來ラザル可キナリ。而シテ彼等ノ所得今ヨリ増加セズトスルモ、此傾向ノ更
 ニ勢ヲ得ル日ハ愈近キニアラン。吾人ハ此等ノ事實ニヨリテ力ノ欲望從ヒテ其作用ナル出生制限
 ガ必ズシモ福利ト平行セザルヲ知ル。進ミテ考フルニ、中級ハ常ニ出生制限ノ中心ト考ヘラルル
 ガ、中ニ就キ特ニ其甚シキハ知識階級ニアリ。前掲、Westergaard、Fahbeck、Steinmetz ノ諸表
 皆之ヲ示セリ。佛國ニ於ケル一九〇六年ノ調査ニヨルモ、兒數ノ最少キハ公設物寄寓者ニシテ其
 兒數ハ利子衣食者及無業者ヨリモ少シ。コレ亦、福利ト出生制限ノ必ズシセ平行セザル事ヲ示ス
 モノナリ。二者ノ平行ハタダ大體ニ就イテ之ヲ云フミ。
 然レドモ、福利ハ此ノ如ク、一方ニ於イテ力ノ欲望ノ強度ヲ決定スル一條件タルノミナラズ、他
 方ニ於イテマタ、此欲望ガ出生率ニ作用スルニ就イテノ消極的條件ヲ爲ス。吾人ハ力ノ欲望ニ從
 ヒテ一定ノ生活標準ニ於ケル福利ヲ要求ス。此要求ニ對シテ現ニ享有スル所ノ福利ノ及バザル事

68) cf. Wolf, a. a. O. S. 41 69) Oldenberg, a. a. O. II. S. 433. Fetter, a. a. O. S. 65.

70) Oldenberg, a. a. O. II. S. 432. Kautsky, Vermehrung und Entwicklung in Natur und Gesellschaft. 1910. S. 193.

アラバ、ココニ調節ノ必要起ル。此調節ハ即チ出生ノ制限トナリテ現ハル。力ノ欲望ガ其出生制限ノ作用ヲ逞クセント欲スルモ、現ニ享有スル福利ノ優ニ此欲望ニ應ズル事ヲ得バ、出生ノ制限ハ起リ來ラザルナリ。カクテ、出生制限ハ常ニ相對的窮乏ヨリ生ジテ福利ヨリ生セズ。而シテ、コハ出生率決定ノ一般原則ニ從ヘルニ過ギザルナリ。出生率ノ多少ハ一ニ相對的福利ノ大小ニヨリテ決定セラル。此二者ハ常ニ完全ニ相平行ス可キ性質ヲ有ス。力ノ欲望以外ノ原理ヲ以テ此事實ヲ説明セントスル一二ノ學說ニ一瞥ヲ授セン。Brentano ノ根本思想ニヨレバ、福利ハ欲望ノ増加ヲ意味シ、欲望ノ増加ハ、Gossen ノ法則ガ欲望満足ノ總量ノ最大ナラン事ヲ要求スル所、既存ノ欲望殊ハ性欲ノ減退ヲ生ズ。性交欲ノ減退ハ自ラ出生ノ減少ヲ促ス可ク、生殖欲ノ減退ハマタ意識的努力ニヨリテ出生ヲ制限セシム可シ。然レドモ、此説明ハ誤レリ。吾人ハ大抵生殖欲ノ衝動ニヨリテ生殖ヲ營ムモノニ非ズ。多クノ場合生殖ハ望マレザリシ結果ニシテ、性欲ノ満足ノ高價ナル代償ニ外ナラズ。現代人ハ此代償ナク出費ナクシテ満足ヲ得ル方法ヲ發明シタリ。今日ノ出生制限ハ Brentano ノ云フガ如ク、積極的ナル満足ノ總量ノ打算ヨリ來レルモノニ非ズシテ、消極的ナル出費節約ノ努力ヨリ來レリ。マタ漠然、文化ノ發達ヲ以テ説明原理ニ擬スルモノアレドモ、當ラス。其論者ガ、*Wohlstand u. Kultur* ト云ヒテ、二者ヲ同一視シ、又ハ其平行ヲ必然ナリトナス缺點ハ、姑ク措イテ説カズ。教化ノ比較的ニ高キ上級ニ於テ出生制限ノ事實著シキノミナラス、出生率減少ノ一般的事實ガ文化ノ最發達セル時期ニ生シタル事ヨリ見テ、此主張ニハ誤謬ナシ。而モ其誤謬ナキハ答辭ノ餘リニ自明ニシテ漠然タル事、人ノ死亡ヲ以テ病氣ニヨルト

72) Brentano, a. a. O. S. 389.

73) Mombert, a. a. O. S. 162.

云フカ如キモノアリ。吾人ハ人文ノ如何ナル特質ガ出生制限ノ原因タルカラ知ラント欲スルノミ。
Wolffカ秩序の家政、又ハ性的生活ノ合理化ヲ以テ説明原理ニ擬スルモ亦當ラズ。此合理化ヤ秩序
ノ觀念ヤ、ソハ近代ノ特産ニ非ズ、而モソハ力ノ欲望ノ干涉ヲ嫉ツニ非ザレバ、出生制限ヲ來ス
事能ハザルナリ。力ノ欲望ガ性欲生活ヲ手段化スルニ及ビテ性欲生活ニ一層ノ合理化アリ、出生
制限ココニ生ズ。衝動的原力ハ實ニ力ノ欲望ニアリ。

五、出生率減少ニ關スル福利説

上ニ述べタルガ如ク、貧富ノ出生率ニハ著シキ差異アリ、其大部分ハ富者ノ出生率制限ヨリ來ル。
此事實ヨリ推測シテ、輒近ニ於ケル出生率減少ハコレ社會ノ福利ノ増進シタル結果ナリトナス見
解アリ。コレ即チ階級間ニ於ケル出生率ノ差異ノ原因ヲ推シ廣メテ時代ノ間ニ於ケル其差異ノ原
因トナサントスルモノナリ。然レドモ此 *nebeneinander* ヨリシテ直ニ *nacheinander* ヲ推サントス
ル見解ハ信ズ可カラザルニ似タリ。吾人ハ貧富ト出生率ノ殆ンド反比例ヲナス *nebeneinander* ノ
事實ニ關シテハ *Wolf, Oldenbourg* 等ノ非難アル⁷⁴⁾ニ拘ハラズ、之ヲ是認スル外ナキヲ思フ。而モ、
之ヲ推シテ *nacheinander* ニ及ボサンハ啻ニ論理的ノ根據ヲ缺クノミナラズ、之ヲ否定スル事實ノ
存在セルモノアリ。

所謂 *Wohlfandstheoretiker* ノ説ク所ヲ見ンカ。彼等ハ富者ノ出生率少キ事ヲ第一ノ根據トシテ、
福利ノ増進ハ出生率ヲ減少セシムトナシ、マタ一八八〇以來ノ出生率減少ガ經濟的繁榮ノ躍進ト

74) Wolf, a. a. O. S. 42.

75) Most, a. a. O. S. 54.

略時期ヲ同ジクスル事ヲ其立論ノ第二ノ支柱トナセリ。然レドモ、吾人ヲ以テ見レバ此二ノ論據トモニ充分ナラズ。第一、福利ト出生制限トノ連絡ハ直接ナラズ。出生制限ノ直接原因ハ力ノ欲望ニアリ。福利ハ此力ノ欲望ヲ通ジテ出生率ノ上ニ作用スルモ、力ノ欲望ハ福利ノミノ函數ニ非ズ。力ノ欲望ハ植物ノ如ク福利ハ肥沃ナル土地ノ如シ。沃地ハ種子ナクシテ植物ヲ生セズ。福利ノ出生制限ヲ生ゼザリシ時代ハ久シカリキ。植物發生ノ根原ハ種子ニアリ、沃地ニ於ケル程生長ノ著シキハ發育ニ都合ヨキガ故ノミ。植物ノ繁殖力ニシテ加ハラバ、稜角ノ地ナホ之ヲ生ゼン。今日ノ貧民ナホ出生ヲ制限セン日ハ愈近ジキツツアルニ非ズヤ。第二、ヨシ福利ト出生制限トノ間ニ一義的關係アリトスルモ、併存ニ認メラレタル此關係ヲ連續ニ及ボス可キニ非ズ。階級間ノ出生率ノ差異ハカカル階級の差異ヲ豫想シ、其差異ニ促サレテ生ズ。然ルニ時代ヲ異ニシタル福利ノ差異ニハ何等階級差異ナク其ノ作用ナシ。カカル推及ハ全然論理的根據ヲ缺グ。第三、一八八〇年前後ヨリ生ジタル出生率減少ハ福利ノ増進ト相平行セリト云ヘルモ、コハ事實ニ當ラザル事甚シ。西歐ニ於ケル福利ノ増進ハ出生率ノ減少ヨリモ遙ニ早ク始マレリ。若シ、福利ノ増進コレ出生率減少ノ唯一原因ナリトセバ、ソハ一八七五―一八〇年頃ニ至ルマデ約半世紀ノ間何等ノ作用ヲモ現ハサザリシモノト云ハザル可カラズ。例ヘバ英國ニ於イテハ、一八八〇年頃マデ、經濟的繁榮ノ最モ著シカリシ期間ニ於テ出生率ハ間斷ナク上騰シタリ。最モ顯著ナル適例ハ我國ナリ。近年ノ急速ナル經濟的發達ニ伴ヒテ國民ノ福利ノ増進極メテ著シキニ拘ハラズ、出生率ハ不斷ナル増加ヲ示シツツアルニ非ズヤ。而シテ一八八〇前後ニ於ケル福利増進ノ程度ハ其以前ニ比シテ

決シテ著シキモノアルニ非ズ。當時ニ始マレル急速ノ出生率減少ヲ説明スルニ足ラザルナリ。若シ夫レ、福利ノ増進ハソガ一定ノ程度ニ達スルニ及ビテノミ出生ノ制限ト減少トヲ生ズト説カンカ。其程度甚ダ低クシテ一八七八〇年代ノ西歐ニ及バザル濠洲ノ急速ナル變化ヲ如何ニシテ説明セントスルカ。⁷⁷⁾

吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ、出生率ノ大小増減ヲ決定スルモノハ常ニ相對的福利ニアリ、換言スレバ一切ノ事情ヲ顧慮シテ決定セラルル所ノ極メテ廣義ニ於ケル生活標準ト其經濟的資力トノ關係ニアリ。⁷⁸⁾而シテ、力ノ欲望ノ作用ハ此生活標準ノ上ニ決定的ナル作用ヲ及ボス。殊ニソガ家族的性欲の生活ヲ手段化シ了レル現代ニ於イテ然リ。カクテ此相對的福利ト云フ點ヨリ見レバ、今日西歐文明國ノ上流并ニ中等階級ノ人人ハ下級貧民ヨリモ更ニ不良ナル状態ニアリ。コレ出生制限ノ下級ニ乏シシテ他ノ階級ニ繁キ所以ナリ。カルガ故ニ、吾人ハ社會ノ各階級ノ比較ニ於イテハ、少クモ力ノ欲望ニヨリテ性欲生活ノ手段化ノ行ハレタル社會ニ就イテ云フ時、福利ノ大ナル階級ニハ出生率低シト云フ事ヲ得可シ。然レドモ、出生率ノ小ナルハ福利ノ大ナルガ故ニ非ズ、相對的窮乏ノ大ナルガ故ナリ。更ニ之ヨリ、異ナレル時期ノ比較ニ轉センカ。生活標準ニシテ一定セル以上、福利ノ大小ニ比例シテ出生率ノ高下スルヲ認ム可シ。而シテ、生活標準ハ自ら習慣ニヨリテ決定セラレ、固定的ナル性質ヲ有ス。カクテ社會ノ富力ノ増加ガ出生率ヲ大ナラシメ、其減少ガ之ヲ小ナラシムルハ普通ノ事實ナリ。若シ、其間ニ於イテ力ノ欲望ノ干渉ニ變化アリ、生活標準ノ變化著シキ場合ニ於イテハ、此變化ト福利ノ變化トノ遲速ニヨリテ相對的福利ノ大サニ變動ヲ生ジ、自ら出生率ニ増減アラシム。近代福利ノ増進ノ著シキニ拘ハラズ、出生率ノ減少ス

77) Most, a. a. O. S. 53.

78) Giddings, Principles of Sociology. 1907. p. 335

ルハ、福利増進ノ速度ニ比シテ、生活標準ノ高マル速度ノ一層大ナルガ故ニ外ナラザルナリ。若シ、近代ノ出生率減少ガ其極或點ニ落付キテ、力ノ欲望ノ干渉ノ更ニ増減セザル場合ニ至ラバ、茲ニ必ズヤ、福利ノ増加ハ出生率ヲ増加セシムルノミニテ決シテ其ノ減少ヲ誘致スル事ナカラン。以上述べタル所ニヨリテ、出生率減少ニ關スル福利説ノ採ル可カラザルヲ見ル可シ。福利説ノ有力ナル主張者 Mombert 自身、既ニ出生率減少ガ福利ノ増進ニヨリテ生ズルト共ニ、マタ生活條件ノ苛重ニヨリテ生ズト説ク。是レ福利ノ増減共ニ出生減少ノ原因タリト論ズル者ナリ。⁷⁹⁾ マタ説イテ曰ク、經濟的繁榮ハ二ノ方向ニ於イテ出生率ノ上ニ影響ス。一方ニ於イテ結婚數ヲ増加セシメ、延イテ出生數ヲ増加セシムルノミナラズ、他方前述ノ如ク其反對ノ結果ヲ生ズト。⁸⁰⁾ 此等ノ言ニヨルモ、出生率減少ニ關スル福利説ノ到底許ス可カラザル事明ナリ。Mombert 自ラ、福利ト出生減少トノ關係ノ間接ニシテ、福利ノ増加モ出生減少ノ結果ヲ生ゼザル事アル可シト説ケルハ、此邊ノ消息ヲ明ニセルモノナリ。カクテ吾人ハ云ハン。福利ノ増進ハソガ力ノ欲望ノ性欲生活ニ對スル干渉ヲ伴ヒ得ル時ハ出生率ヲ減少セシム可シ、然ラザル場合ニハ其事ナシ。福利ト文化トノ急速ナル發達ガ却リテ出生率ヲ増加セシメツツアル近年ノ日本ヲ見ヨ。

吾人ハココニ論結シテ云ハン。西歐諸國ニ於イテ、貧富ノ程度ト出生率ノ間ニ存スル平行關係ニ至リテハ、決シテ否定ス可キニ非ズ。而モ、ソハ階級の差異ト更ニ之ト協働スル力ノ欲望ノ勢力ヲ前提シタル現象ナリ。經濟的繁榮ハ單ナル福利ノ變化以外何等階級の差異ヲ伴ハズ、マタ必ズシモ、力ノ欲望ノ作用スル事ヲ意味セズ。彼階級間ノ出生率ノ差異ヲ直チニ福利ノ時期的變化ノ上ニ推及スル事ノ誤謬ハ明白ナリ。階級別出生率ノ差異ハ出生率減少ニ關スル福利説ニ對シテ何等ノ論據ヲ供スルモノニ非ズ。(大正五年三月十六日草稿)

79) Mombert, Ueber den Rückgang. S. 830. Rümelin, Zur Ueberbevölkerungsfrage. S. 597. Most, a. a. O. S. 52.

80) Brentano, op. cit. p. 384